

Title	政治家としてのスウィフト
Sub Title	Jonathan Swift as a politician
Author	海保, 真夫(Kaiho, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.218- 233
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0218

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

政治家としてのスウィフト

海 保 真 夫

I

ジョナサン・スウィフトは牧師、神学博士、政治家、詩人、その他いろいろな資格を持つ男であり、さまざまな方面に関して作品を著わした。そのなかで、政治家としての行動が、かれの意識において最も大きな比重を占めていたように思われる。また、社会に与えた影響という点から見ても、最大の効果のあった著作は政治に関する作品である。

当時の英国は党派心によって国中が毒されていた。ヴォルテールは『哲学書簡』のなかで、「国民の半分が絶えず残りの半分と喧みあっていた」と語っている。このような時代に己れの政治的見解を明らかにすることは、しばしば自己の運命を賭するに等しかった。たとえ成功したとしても、それは大きな犠牲を伴わずにはおこななかったし、失敗はほとんど再び起つ能わざる打撃を意味したのである。当時は、平和裡に政権の交代を行なう習慣が未だ確立していなかった。失脚は権力の喪失だけでなく、ときには生命の危険さえ意味した。1711年12月7日、トリー政府の和平政策が上院で否決されたとき、政府側の一員であったスウィフトは、その翌日『ステラへの日誌』のなかに、次のように記している。

私は大蔵大臣に向かって言ってやった。「我々は負けましたが、私のほうが貴方よりまだましですね。貴方は身分が高いから、断頭台で首を斬られることになる。私のような下っ端は絞首刑ですから、とも

かく五体ばらばらにならずに墓場にゆけますよ」

この文章はもとより冗談を含んではいるけれども、失脚した政治家の身がけっして安全ではなかったことは、1714年の政変を見ても明らかである。トーリー党の領袖のうち、オックスフォード伯爵はロンドン塔に送られるし、ボリングブルックはフランスに亡命しなければならなかった。スウィフト自身もアイルランドに蟄居を余儀なくした。

政治という危険な仕事に係わるには、己れの幸運を信じて疑わぬ楽天主であるか、あるいは、自己の奉ずる大義のために死をも辞せずとする信念が必要であった。スウィフトがこのことをはっきり自覚していたかどうかは判らない。しかし、かれにそれだけの覚悟がなかったとすれば、後に己れの軽卒を後悔するときがくるであろう。というのは、かれの生涯に訪れた数度の転機において、その進路を決定したのは自ら公言した政治的意見であったが、それによって定められた方向は、けっして内心の希望と一致してはいなかったからである。

スウィフトは滑稽なほど用心深く、慎重な男であった。筆禍を招くことを危惧して、ほとんどの作品を匿名で発表している。出版の自由を規制しようとする動きがあったとき、かれはこれに賛成しながらも、すべての印刷物に作者の住所氏名を掲げさせるという案には絶対に反対であった。かれはその理由を次のように語っている。

というのは、敬虔な人々は、これまで宗教上の作品を発表するさいに、キリスト者としての謙虚な気持から、自分の名を隠すのが常であった。それに、真の天才、あるいは有識の人であれば、処女作を世に送り出すとき、打ち勝ち難い慎しみと自信のなさを覚えるのは当然である。

『女王アン時代の最後の四年間の記録』

この言葉がスウィフトの真意を表わしているとは、もとより信じ難い。かれが匿名による出版を事としたのは、キリスト者の謙遜よりも、むしろ身の安全にたいする顧慮がその原因であった。このように小心翼翼たるスウィフトが、政治への参加を余儀なくしたのは、もちろん種々の理由があった

と思う。国を憂える気持も、多少はかれの心に存在したかもしれない。しかし、直接の動機は野心にあった。かれは国教会の僧侶であり、その栄達は、政治にたいするかれの貢献度にかかっていたのである。

スイフトが僧職に就いたのは、ある意味では自然なことであった。当時は階級差別の甚だしい時代であったから、かれのように才能以外に拠り所を持たない人間が立身するのは非常に困難であった。そのなかで、教会は比較的公平に門戸を開放していた。門地と財産に恵まれぬ人間にとって、驥足を伸ばしし得るほとんど唯一の場所とみなされていた。スイフトが教会に入ったのも、それが大学卒業者の選んでおかしくない道だったからであり、また不十分ながらも出世の機会を提供しているように思われたからであろう。

しかし、単に己れの才能のみを恃んで立身することは、いかなる世界においても不可能である。権力と利得が多少なりとも係わってくるとき、そこには必ず情実が入りこむからだ。国教会の高僧といえ、名誉と豊かな収入とが保証される一個の安定した職業であったから、その地位は貴族や有力な政治家によって左右されることが多かった。かれらは自分に縁故のある人間を引き立てようとしたし、僧侶もまたかれらの後援を求めたのである。スイフトはこの現実を教会に入る第一歩において悟らされた。庇護者のサー・ウィリアム・テンプルと衝突し、かれのもとを離れ、アイルランドで僧職に就こうとしたとき、教会は、テンプルの推薦状なしには、スイフトに按手札を授けようとはしなかった。スイフトは涙をのんでテンプルに手紙を書き、推薦状を請うた。この手紙は現在かれの書簡集に収められ、尊大なスイフトが、ときにはいかに悲痛な屈辱に耐えねばならなかったかを後世に伝えている。しかし、このように僅かながらも有していた私的な後援は、テンプルの死によって失われた。スイフトは、昇進の手段を求めて他に目を向けた。

前述の説明と矛盾するようであるが、国教会は政治にたいして大きな勢力を持っていた。教会の人事にしばしば政治家が介入したからといって、教会の方針そのものまでかれらが自由にし得たわけではない。教会は、己

れの既得権を侵そうとする者には頑強に抵抗したし、その発言を自己の権益の保持という消極的なものに留めておく限り、国民の大多数は教会を支持していた。しかし、由来、既得権の限界を定めることは困難であり、その所有者が力ある存在であれば、境界線は無限に伸びてゆく。自己の権益を守ろうとする教会の発言も、教会が力ある存在である以上、当然「積極的」なものにならざるを得ない。しかも、国教会が自己の権益とみなしたのものには、英国の政治に係わりを持つものが多かった。政治家がこの事実を無視して行動すれば、かれらの命取りにもなりかねなかったのである。たとえば、1709年11月、ヘンリー・サシェヴェラルが「教会の危機」を叫んで政府を攻撃する説教を行なったとき、それは翌年の政変につながるほどの反響を呼んだ。したがって、政治家は常に教会の動向に注意を払わねばならず、ウィッグ党もトーリー党も、単に私的な利欲からばかりでなく、政治上の必要からも、自派の同調者を教会内の重要な地位に据えるべく腐心した。逆にいえば、野心を抱く僧侶たちは、いずれかの党派に積極的に身を投ずることによって、野望を遂げようとしたのである。スウィフトもかれらの一人であった。庇護者のテンブルが死んだとき、かれは、自己の才能を政党に提供する以外に昇進の道が残されていないことを知った。それは危険な仕事であったが、栄達への欲望はなにものにもまして強かった。

ポープとボリングブルックの両者に宛てた手紙のなかに、スウィフトの世俗的な野心を伝える有名な文章がある。

流俗に抜きんでて名を著わすべく、私は少年時代よりひたすら努力してきた。それは、私が爵位と富に恵まれない人間だったからである。自分の才能が正しく評価されようとされまいと、そんなことは大した問題ではない。とにかくその才能を多少なりとも認めてくれる人びとによって、貴族のごとく待遇して欲しかったのだ。文人として、あるいは学者としての名声が、私の場合、ガーター勲章や六頭立ての馬車の役目をしてくれるのである。

この手紙の書かれたのは1729年4月、この頃はすでに、スウィフトは一切の野心を断念せざるを得なくなっていた。この文章を見ると、世俗的な名

譽の獲得だけが、かれの生涯における唯一の目的であったような印象をうける。サッカレーは『英国のユーモア作家』においてこの手紙を引用し、スウィフトを節操なき一個の無頼の徒と断定した。しかし、この批判は誤りであった。

もとよりスウィフトは、いかなる意味においても、国家百年の計に思いをいたす底の政治家ではない。また、小カトーのごとく、節に殉じて死を恐れず、ひとつの信念の象徴として人間の記憶に残ることを願う男でもなかった。前者たるにはそれだけの見識と実行力を欠き、後者たるには勇氣と想像力に乏しかった。かれの政治への参加がいかなる動機から出発しているにせよ、唯ひとつ確かなことは、政治的抱負がなにひとつかれにはなかったことである。結局スウィフトは、サッカレーの目したように、筆一本に恃んで生きる a soldier of fortune になるより仕方がなかった。己れの才能にもっとも高い値を付ける党派に奉仕し、できるだけ多くの報酬をひきだすことを、政治における自己の目的とすべきであった。

たしかにスウィフトの世俗的な野心は、自ら告白しているように、かれの心に巢食って離れることがなかった。しかし、かれはその成就に全てを賭けきることができなかったのである。かれの野心が途中で挫折したのも、読者が人間としてのスウィフトにしばしば不満を覚えるのも、むしろその原因は、無頼の徒に徹し得なかったかれの性格にあるのである。野望を達成するために、信義も朋友も犠牲にして憚らない人間は、たとえその企てに成功しても、変節者の汚名は甘んじて受けねばならない。かれらの目的は成功することであって、世人の尊敬を集めることではない。成功しなければ、かれらの行為は無意味なのである。しかし、スウィフトは、この種の人間が当然持ち合わせていなければならない図太さと、利益の前に一切をなげうつ剽悍さを欠いていた。

スウィフトは栄達を激しく欲しつつも、同時に読書人でもあったから、俗世の成功よりも気高いものがあることを知っていた。『サー・ウィリアム・テンプル頌詩』において、スウィフトは、中傷と欺瞞に満ちた宮廷を去ってムーア・パークに引退したテンプルを称えている。

詩神よ。田園生活の喜びを歌って下さい。

未だ人の知らない淨き調べをもって、

貴女の姉妹なる「自然」がもたらす楽しみを示して下さい。

歌って下さい、谷と森と野辺のことを。

広き草原に告げて下さい、

今や貴女が偉大なる帰依者を得たことを。

政治上の態度の決定を迫られるたびに、必ずといっていいほどスウィフトの行動につきまとう逡巡は、かれにしてみれば、良心、あるいは信念の現われであったかもしれない。その逡巡は、かれが利益の追求のみを事とする無頼漢ではなかったことを証明するものかもしれない。しかし、この種の逡巡は、政治上の成功を目指す者にとって、ときには致命的な障害になる。スウィフトは躊躇しつつも結局変節することを辞さなかった。そして残念なことに、変節さえ犯して追求したものを、ついにかれは獲得できなかったのである。

スウィフトが政治上の野心を遂げ得なかったのは、結局のところ、己れの果たすべき役割について、明瞭な認識を欠いていたからであった。栄達を求めて政党に奉仕を申し出たとき、それが何を意味するのか、スウィフトにははっきりした自覚が不足していた。いずれの党派にたいしてであれ、一旦それに忠誠を誓ったならば、党員は全面的な服従を要求される。自分の所属する政党がいつも陽のあたる場所を歩くわけではなく、ときには長い雌伏に耐えねばならない。そのときもなお党員は、一貫して自党を支持する義務がある。しかも、こうした変わらぬ忠誠が常に酬いられるとは限らない。しかし、成功するには、政党に対するこの全き忠誠が必要であった。

この残酷な現実耐えて複雑な政界を生きぬいてゆくには、己れの信念を持ち、その信念と自派の主張を一致させ得る人間でなければならない。その主張に心から傾注し、政治にそれを実現させることを自己の使命とする人間でなければならない。あるいはこれとは逆に、報酬のみを唯一の目的とする不敵な傭兵に徹し、いかにいかがわしい仕事であろうとも、平気

で応じ得る厚顔無恥の徒たる必要がある。しかし、スウィフトはそのどちらでもなかった。最初はいずれも、自分は筆一本に頼って生きる傭兵であり、栄達だけが己れの目的であると心に言い聞かせていたかもしれない。おそらくかれは、栄達を断念してまで抵抗しなければならない問題が政治にあるとは、想像さえしていなかったのであろう。甘い考えであった。政界に入ってもなくかれは、自党の方針のなかに、国教会の僧侶として承服し難いものがあることを知るのである。

以下に、ウィッグとトーリーの両党が、当時の政治上の諸問題にたいしていかなる態度を取っていたかを述べて、スウィフトがウィッグ党からトーリー党に移らざるを得なかった事情を明らかにしたいと思う。

Ⅱ

1710年11月16日、スウィフトは、『エグザミナー紙』の15号において、ウィッグ党とトーリー党の口汚い罵り合いを嘆いて次のように語っている。

最も始末に負えないのは、いま述べたあの無礼きわまる政治新聞屋どもである。この二匹の扇動家は、根も葉もない噂をばらまいては、悶着の種をつくって歩いている。当事者同士の話し合いにまかせておけば、必ず互いに納得がゆくものを、奴らが余計な口出しをするために、かれらを仲違いさせてしまう。

ウィッグ党とトーリー党は、宗教問題や政治問題に関して、日ごと口汚く罵りあっている。しかし、両党から思慮分別のある正直な人間を選び、これらの問題について互いの意見を検討させてみるならば、両者の間に重要な相違点などなにひとつ無いことが分かるであろう。ウィッグ党とトーリー党には、なんら主義主張の相違が存在しないとする説は、スウィフトが自分の変節を弁明するさいに、きまって用いた口実であった。この見解は、たしかにある意味では正しかったが、同時に、スウィフトの政党政治に対する無知をも曝露している。

スウィフトが主張したように、公式的には、両党の基本方針に相違点はなかった。名誉革命を承認することにより、両党は、少なくとも表面上は、

同じ立場に立ったのである。しかし実際には、両党の真意は互いに大きく違っていた。ウィッグ党が革命の成果を積極的に歓迎したのにたいし、トーリー党は不承不承それに従ったに過ぎないからである。伝統的にウィッグ党は、王権と宗教に関してかなり急進的な態度をとってきた。これにたいしてトーリー党は、そのいずれに関しても保守的な意見を持っていた。その意味で、前者は清教徒革命における議会派の「円頭党」、後者は王党派の「騎士党」の流れをくむものであった。

王権に関する両党の見解の相違とは、手短かに言えば、国王は法の支配下にあるのか否かということである。ウィッグ党は次のように主張した。「君主制は王と国民の間の契約である。したがって、王が法を尊重しないとき、国民は臣従の義務から解放される。」トーリー党は王権神授説を奉じてこれに対抗した。「王はその支配権を神から授かっており、責任は神にたいして執る。したがって、当然王は法を超越した存在である。」これがその内容である。これら二つの思想の対立は、ジェイムズ一世の治世に始まり、清教徒革命と王政復古を経て、名誉革命の成立とともに落ち着いた。すなわち、「国王は法の支配下にあり、議会の承認を得てはじめて君主になりうる」というウィッグ党の主張が正式に認められたのである。革命以後、これは王権に関する公式見解となり、王権神授説は表舞台から姿を消す。しかし、ウィッグ思想の具体的産物である立憲君主制が、国民の間に深く根を下ろすには、なお長い年月を要するであろう。トーリー党は新制度に心から服してはいないし、国民の大多数はかれらを支持していたからである。

元来、国民とは保守的なものであり、足許に火でもつかない限り、改革など望みはしない。護民卿の全盛時代においても、大半の英国民はスチュアート王家に忠誠であったし、宗教的には国教徒であった。そのかれらが現体制を打破して名誉革命へと向かったのは、王家への忠誠と国教会への帰依という二つの保守的立場が、互いに相容れなくなったからである。ジェイムズ二世が旧教の復活を企てたとき、国民は、王の意図が国教会を危くするものであることを知った。そこでかれらは、王と教会を秤にかけ、

止むを得ず後者を選択した。国教会は、国民にとって君主制以上に神聖な存在だったからである。また、旧教への嫌悪は、国教徒、非国教徒、ウィッグ、トーリーを問わず、全国民に共通する感情であった。王の行為は、自ら国民の一致した抵抗を求めるに等しく、結局それが革命の成功を保証したのである。ジェイムズ二世がいかにして旧教を国民に押しつけようとし、かれらがいかに抵抗したかは、マコーレーの『英国史』に詳しく描かれている。国民は王を追放し、王の女婿であるオレンジ公をオランダから招いて王位につけた。以後かれは、ウィリアム三世の名によって知られることになる。

名誉革命の促進に寄与したいまひとつの原因は、王政復古以後スチュアート家のとった外交政策にある。当時フランスはルイ十四世の統治下であり、強大な軍事力を背景に、ヨーロッパの覇権を手中に収めようとしていた。英国の伝統的な政策は、大陸に強国が出現するのを防ぎ、ヨーロッパの均衡を保つことである。しかるにチャールズ二世とジェイムズ二世は国策に背き、フランスと結んでその覇業に協力したのである。また、フランスは代表的な旧教国であり、ナントの勅令を廃して新教徒を迫害していたから、新教国たる英国にとって、フランスの強大はさまざまな点から脅威であった。したがって、英国民がジェイムズ二世を遂って、オレンジ公を迎えたのは、伝統の国策への復帰を意味したのである。

しかし、ジェイムズ二世の亡命とともに、国民の足並みは再び乱れ始めた。かれらの多くは、王と教会の二者択一を迫られて、仕方なく王を追放したのであり、心の底では依然としてスチュアート家を慕っていた。国教会の危機を見て止むを得ず立ち上がったトーリー党も、己れの行動が意外な方向に英国を導くのを知って、驚きといましましさを覚えたに違いない。かれらはオレンジ公の処遇をめぐる分裂した。王の神権と君主への無抵抗を説いてきたかれらとしては、ジェイムズ二世の在世中に他の王に忠誠を誓うことは、理論的には不可能である。そこでオレンジ公を摂政の地位に据えようとするが、公爵は、責任のみを負って権力を持たないような地位に甘んずる男ではなかったから、トーリー党もかれの即位を認めざ

るを得ない。かれらの大半は、ジェイムズ二世はその逃亡によって退位したのであるという詭弁を拠り所にし、ウィリアム三世に忠誠を誓った。しかし、王権神授説に忠実な者は、新王への臣従を拒んで公職を去った。かれらは「臣従拒否者」と呼ばれている。また、スチュアート家の復辟を謀る「ジャコバイト派」は、秘かにフランスに亡命したジェイムズ二世と連絡する。かれの死後は、その遺子や孫を擁してハノーヴァー王家の顛覆を企てる。ウィリアムに臣従を誓ったトーリー黨員も、その多くは「ジャコバイト派」に好意を抱いており、実際にその計画に参加した人間も少なくない。結局かれらの企ては成功しなかったが、スチュアート家に寄せる愛惜の情は、ハノーヴァー家の基礎が固まってからも、国民の間に長く残存した。1775年、ジョンソン博士はボズウェルに次のように語っている。

ジェイムズ二世は善良な君主であった。ただ不幸にも、臣民を救済するには、かれらを旧教徒に改宗させる必要があると信じていたのだ。

しかし王には、王国を失ってまで、臣民の魂の救いになると信じたことを行なうだけの偉大さがあった。

ウィリアム三世の最新の伝記作者スティーヴン・バックスターは、かれを「ヨーロッパの自由の擁護者」と呼んでいる。事実かれは、新教徒を守り、ルイ十四世の野望を挫くことに一生を費やした。1702年、対仏戦争を直前に控えてかれは急死し、ジェイムズ二世の次女で新教徒のアンが王位に就くが、かれの政策はそのまま受け継がれてゆく。ウィリアム三世は、自分の死後その生涯の事業が崩壊することを恐れ、生前に「王位継承律」を制定しておいた。これにより、フランスにいるジェイムズ二世の遺子は、旧教徒であるとの理由により斥けられ、英国の王位はアン死後、ジェイムズ一世の曾孫ハノーヴァー選帝候ジョージの手に渡ることになる。対仏戦争と「継承律」は、アン女王の時代、すなわちスウィフトが政治に関係した時代に、ウィッグとトーリーの両党にとって、重要な論争点になった。オランダと結んでフランスに対抗するのは、ウィリアム三世以来の政策である。ウィッグ党はもちろん強硬に対仏戦争を主張するが、トーリー党は消極的であった。「継承律」については、公式的には両党ともこれに反

する行動はとれない。しかし、前述したように、トーリー党は秘かにスチュアート家の復辟を願っていた。これがため、ジョージ一世の即位以後、トーリー党は数十年にわたる雌伏を強いられるのである。

ウィッグ党とトーリー党のいまひとつの論争点は宗教問題である。王政復古後に発令された「宣誓令」は、名誉革命を経て依然として残っていた。これはすべての官吏に国教会の聖餐式を受けるように命じた法律で、これにより旧教徒と非国教徒は公職から除外された。ウィッグ党は、信仰の自由を唱えてしばしば「宣誓令」の廃止を企てるが、成功しない。かれらの真意は、国教会を支持者にもつトーリー党に対抗するため、非国教徒を自分の陣営に引き入れることにあった。これにたいしてトーリー党は、当然のことながら、厳しく国教遵奉を課すことを主張した。国教会内部にも、非国教徒に同情的な低教会派と、これに反対する高教会派が存在する。

以上がウィッグ党とトーリー党の主要な相違点である。トーリー党は、常に国民の多数から支持されながら、必ずしも政治の主流を歩み得なかった。名誉革命の意義に対する曖昧な態度のゆえに、少数派たるウィッグ党に名を成さしめたのである。

Ⅲ

スウィフトの政界に入る切っかけとなった作品は、1701年に発表した『アテネとローマにおける貴族と平民の紛争と、国家に及ぼしたその影響について』である。このなかでかれは、国家は、君主、貴族、平民の力の均衡の上に成り立っており、三者の均衡がどこで崩れても、その国は専制政治に墮すると主張した。これはスウィフト鐘愛の政治理論であつたらしく、『ガリヴァー族行記』第二編の七章にも同じことが述べられている。しかし、前記の作品は漫然と一般論を説いたものではなく、他に執筆の動機を持っていた。すなわち、その頃トーリー党によって弾劾されていたサマーズ、ハリファックスらウィッグ派の大臣の弁護を目的にしていたのである。スウィフトはプルタルコス of 英雄に名を借りて、これら的大臣を称揚し、トーリー党の企てをギリシャ・ローマの衆愚の行ないに比した。作品

は、執筆態度において不偏不党を標榜しているけれども、意中の政党はもちろんウィッグ党である。結局スウィフトの露骨な秋波は受け入れられ、かれはサマーズ、ハリファックスらの面識を得た。以後スウィフトは、1710年トーリー党に鞍替えするまで、ウィッグ党の同調者として行動するのである。

スウィフトはアングロ・アイリッシュ、すなわちアイルランド生まれのイギリス人として、ウィッグ党と利害を共にしていた。土着のアイルランド人は一般に旧教徒であったから、ジェームズ二世は、旧教の復活を企てるにあたり、かれらの力を利用した。また亡命後も、かれらの支援を足場にしばしば王座の奪回を試みている。したがって、新教徒たるアングロ・アイリッシュは、アイルランド人に対抗するため、必然的に名誉革命を支持したのである。

スウィフトがウィッグ党を選んだいまひとつの理由は、庇護者のサー・ウィリアム・テンプルの感化である。テンプルの外交政策は、英蘭同盟によってフランス勢力の伸長を押えることにあった。名誉革命はこの政策の実現を意味しており、またウィリアム三世と個人的に親しかったところから、テンプルはウィッグ党に同情的であった。テンプル家に寄食していた頃の数年は、スウィフトにとって必ずしも快い思い出とはならなかったけれども、かれは生涯テンプルへの敬意を失わなかったし、その影響は、かれが意識していた以上に大きかったのである。

しかしながら、ウィッグ党の主張とスウィフトの立場に共通点が見られるからといって、求めて政治に携わるほどの抱負と熱意が、かれの心に存在したわけではない。スウィフトを政治へと駆り立てたものは、あからさまに言えば、個人的野心の追求に過ぎなかった。1701年の作品によって、自ら御用作家を勤める気持のあることを明らかにし、ウィッグ党はかれの才能を買ったのである。政治に対する世論の影響力が認識され始めた当時において、この種の取引きは珍しいことではなかった。スウィフトの仕事は、ウィッグ党の有利になるよう世論を導くことであり、その報酬は英国における主教あるいは首席司祭の地位である。スウィフトは、アイルランドに僧職

を有する身であったが、1710年までに四度英国に渡っており、ときにはロンドン滞在が足かけ3年におよぶこともあった。かれのロンドン訪問にはいろいろの理由があったけれども、昇進の打診とその工作は、常に主要な目的のひとつであった。スイフトが、目的を達成するためには阿諛追従さえ辞さなかったことは、ハリファックスへの手紙が明らかにしている。

失礼ではございますが、閣下はこの世で最も無分別な方とお見受けいたしました。それと申しますのも、閣下は私ども全員を合わせたより50倍も大きな才能をお持ちでありながら、それにたいして一顧も与えておられないからでございます。閣下は、ご自身のことは一向に頓着なさらずに、絶えず他人の才能を鼓舞することのみを心がけておられます。(1709年6月13日)

しかし、1701年ウィッグ党に身を投じて以来、ひたすら栄達を追い求めつつも、他方においてスイフトは、自党の態度に不安を感じ始めていた。信仰の自由を唱えて非国教徒を自派に引き入れることは、ウィッグ党の基本方針であったが、スイフトは、これが国教会の崩壊につながることを憂えたのである。ウィッグ党が「宣誓令」の廃止を意図し、スイフトにも賛意の表明を迫ったとき、かれは、自己の立場を整理し、明らかにしておく必要を感じた。1708年に書かれた『宗教と政治に関する英国教会員の意見』は、このことを目的にした作品である。これは1711年に『雑文集』に収められ、はじめて世間に発表された。この作においてスイフトは、王権神授説を斥けて立憲君主制を支持し、絶対主義を唱える者は人類共同の敵であると主張した。また宗教問題については、非国教徒が各自の宗教を信仰することは許可するにしても、かれらの国政参加は認めるべきではないと述べている。すなわち、「宣誓令」廃止の企てに反対の旨を表明しているのである。スイフトは、多少の迂余曲折はあるけれども、とにかく生涯この立場を維持し続けるであろう。しかし、党派間の対立が激しい時代において、この立場を守って成功することは甚だ覚束なかった。というのは、かれの立場は、宗教的にはトーリー党、政治的にはウィッグ党の見解に従うものだからである。その後もかれは、形式的には依然としてウィッ

グ党に留まってはいるけれども、心はかれらから離れていた。

スウィフトがトーリー党に転じたのは、1710年ウィッグ党が失脚し、トーリー政府が出現したときのことである。この間の経緯とその後のかれの行動は、『ステラへの日誌』に克明に記されている。この頃かれは、アイルランド教会から「女王基金」の申請という任務を託されて英国にきていた。最初はウィッグ派のゴドルフィンに執り成しを頼むが、罷免されたばかりの前大臣は頗る素気ない返事を与えたらしく、スウィフトは早速諷刺詩を作ってかれを攻撃した。まもなく、新内閣の中心人物ロバート・ハーレー（後のオックスフォード伯爵）とスウィフトとの会見をとりもつ人間があらわれ、ハーレーはその会見において、「女王基金」の斡旋を承諾した。同時に、スウィフトの昇進問題について二人の間に黙約ができ、かれはトーリー政府のスプークスマンを勤めることになる。ハーレーと、もうひとりの党の指導者サン・ジョン（後のボリングブルック子爵）は、スウィフトを歓待し、かれを家族のように遇した。以後、1714年の政変まで、かれの生涯における最も得意の時代が続くのである。かれは連日のように大臣たちと会い、宮廷に出入した。ウィンザー宮殿において颯爽と振舞うスウィフトの姿を目撃したある人が、いささか意地の悪いかれの肖像を残している。

スウィフト博士はソロルド氏に向かい、ロッテルダムの英国教会の牧師として百ポンドの年俸が貰えるよう大蔵大臣（オックスフォードのこと）に頼んでやると約束している。また、かれは、赤いバッグを持って女王の所へゆこうとするグウィン氏を呼び留め、大蔵大臣からの伝言があると声高に話しかける。次に、若い貴族をつかまえて、英国で最も優れた詩人はポーブ氏だと教える。詩人は丁度ホメロスの英訳を始めたところで、自分としては、全員に予約してもらうつもりだと、かれは言う。かれ曰く「私は、千ギニーの予約を集めるまで、著者に出版させないつもりだ。」やがて大蔵大臣が現われ、スウィフト博士についてくるように合図する。祈禱の始まる直前に、二人は姿を消した。

トーリー内閣の主要な政策は、スペイン継承戦後を終結させ、フランスと講和を結ぶことにあった。民心は長い戦争に倦んでいたが、ウィッグ党

や同盟諸国、連合軍司令官のモールバラ公などは続行を望んでいた。トーリー政府がスウィフトに依頼した任務は、世論を喚起して、国民の間に平和を求める気持を起こさせることであった。かれは『エグザミナー紙』に拠って、政府の弁護と野党の攻撃に力を尽し、また、『同盟国の行動』を含む幾つかのパンフレットを発表した。『同盟国の行動』は最大の効果を収めた作品で、1万1千部売れたと伝えられている。当時にしては驚くべき数字であった。このなかでスウィフトは、同盟諸国が、戦費の負担など戦争の損失の一切を英国に押しつけ、利得は独り占めにしていると述べた。かれは、作品の反響を得意気に『ステラへの日誌』に記している。

今日、下院は、わが国が同盟諸国によって虐待されている旨を決議した。演説する者は全員私の本を論議の根拠に用いている。今日の決議は、私の主張の正しさを確証するものだ。(1712年2月4日)

トーリー党は、上院のウィッグ勢力に対抗するため、12人の新貴族をつくり、主戦派のモールバラ公を連合軍司令官の職から解き、1713年ついにユトレヒトに平和条約を締結した。

講和の見通しがつくとともに、政府部内には安堵の色が見られ、同時にスウィフトは、心の張りを多少失ったらしく思われる。『ステラへの日誌』に脱落が目立ち始めるのもこの頃からである。健康も思わしくなく、また女の問題も絡んでいたが、気落ちの最大の原因は、やはり昇進が捗々しく行かないからであった。当時のスウィフトは、いわばレルマ公に仕え始めた頃のジル・ブラスと同じで、権力の絶頂にあるように見えたが、実質的な利益はなにひとつ得てはいなかったのである。昇進の不首尾については、女王の反対など種々の原因が伝えられている。結局かれが獲得したものは、僅かに聖パトリック寺院の首席司祭の地位に過ぎなかった。一方トーリー党内においては、オックスフォードとボリングブルックの対立が表面化し、内閣は分裂の危機に面していた。スウィフトは両者の和解を図るが成功しない。やがて女王が死に、ジョージ一世がドイツから到着した。

「継承律」に反して秘かにジェイムズ二世の遺子と交渉していたトーリー党は、ウィッグ派の追求を受けて四分五裂する。ボリングブルックは亡命

し、オックスフォードはロンドン塔に送られた。スイフトは、1714年8月、厭でたまらぬアイルランドに帰ってゆく。以後かれには、権力の中樞に列する機会は二度とめぐってはこない。

IV

スイフトが仕えたトーリー政府は、議会史上画期的な行為をなし、後世に先例を遺した。ひとつは、平和条約に反対する上院にたいして、新貴族の創設をもって答えたことである。これにより、究極的には上院は、下院の決議に抵抗し得ないことが明らかになった。すなわち、下院を国の最高決議機関とする考えが、実質的に認められたのである。いまひとつは、戦争の続行を主張したモールバラ公を解任することにより、軍人に対する文官の優位を確立したことである。もしスイフトが後世に望みを託す政治家であるならば、もって瞑すべしと言えるかもしれない。しかし、議会政治に信をおかなかったかれは、このことを理解しなかった。それでは、かれはトーリー党に加わって、政治的には何を得たのであろうか。それは、一言で評するならば、一切の信念の喪失である。スティールとのあまり名誉にならない論争において、スイフトは、トーリー政府はけっして「継承律」を危くしてはいないと答えている。しかし実際には、トーリー党は、スイフトの知らぬまに、秘かにジェイムズ二世の遺子と交渉していたのである。宗教問題においてウィッグ党と相容れなかったかれは、政治問題においてトーリー党に裏切られたのである。1714年以前のスイフトは、ウィッグ派に属していたときも、トーリー党員のときにも、常に破壊よりは保存に努めていた。かれが守らんと努力したものは、現在では意味を失っているけれども、ともかくかれは、その態度において建設的であった。しかし、いまや守るべきものの全てを失ったスイフトは、次は破壊を旨とするデマゴグに変身するのである。